



第 48 号

2016年10月発行

佐賀大学医学部

〒849-8501

佐賀市鍋島5丁目1番1号

http://www.saga-med.ac.jp/

新聞編集委員会

印刷/株昭和堂

新任教授挨拶



組織・神経解剖学分野 教授

城戸 瑞穂

皆さん、こんにちは。平成28年2月1日付で医学科生体構造機能学講座組織・神経解剖学分野の教授に就任しました。どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

私は、九州大学歯学部を卒業した後、歯に被せ物をしたり入れ歯を作ったりを専門にする歯科補綴学の大学院に入学しました。卒業時には一般歯科医師になるつもりでしたので、まさか基礎医学の教員になるとは想像したこともありませんでした。人生とは分からないものです。私たちが学生の頃は、基礎配属やリサーチエクスポージャーといったカリキュラムの中で研究を体験する機会がありませんでしたので、研究について全くわかっていませんでした。そこで何かをとおと勉強してみたいという思いから大学院に入りました。その頃は今のような研修医

制度は整っていませんので、大学に残る人は授業料を払って研究生あるいは大学院生として研究や臨床を行う場合が多かったようです。卒業後1年目は歯科臨床をしながら研究をかけた程度でしたが、その後、ご縁があつて口腔解剖学講座で研究することになりました。解剖学講座では、着任した後の田中輝男教授や教室の先生方から、形態学の基本を文字通り一から教わることで、害や関節の雑音や痛みなどを呈する顎関節症という疾患概念が提唱され始めていましたので、顎関節における感覚神経支配を明らかにするというのが私に与えられた研究テーマでした。解剖学講座でのスタートは、4月13日の金曜日、新婚旅行から前日帰国したばかりの私は、夜の10時過ぎまでラットの実験を熱心に

教えていただき、急いで家に戻ったら夫が不機嫌そうに夕食を作っていました。その頃は携帯電話もありませんから、かえって良かったのかもしれない。今では台所に立とうとしない夫ですが、その頃は家事もそこそこやってくれました。辛い研究も順調に進み、和気藹々とした雰囲気の中で研究の楽しさや厳しさを満喫し、2本の論文を発表させていただくことができました。

1年目は歯科臨床をしながら研究をかけた程度でしたが、その後、ご縁があつて口腔解剖学講座で研究することになりました。解剖学講座では、着任した後の田中輝男教授や教室の先生方から、形態学の基本を文字通り一から教わることで、害や関節の雑音や痛みなどを呈する顎関節症という疾患概念が提唱され始めていましたので、顎関節における感覚神経支配を明らかにするというのが私に与えられた研究テーマでした。解剖学講座でのスタートは、4月13日の金曜日、新婚旅行から前日帰国したばかりの私は、夜の10時過ぎまでラットの実験を熱心に

とんどありませんが、実験を重ね、仮説通りの結果が得られた時には、言葉に表せない楽しさや嬉しさでいっぱいになります。そうしたワクワクした気持ちで研究を続けられる原動力であると思っています。まとまった成果が得られると発表です。先輩が国際学会で発表すると聞きつけ、ちゃっかり私もポスター発表にこぎ着けました。教科書でしか見たことのない有名な研究者が私のポスターの前に来てくださり、「今書いている教科書に入りたいので写真を送って」と言われた時には、自分が英語を正しく理解できているのかしら?と疑いつつも、とても誇らしい気持ちになりました。私の研究対象に興味を持つ研究者が少なかつたせいか、国内では高名な先生と一介の大学院生が言葉を交わす機会など恵まれなかつたので、Tシャツに半パン姿の著名な研究者から率直なコメントを直に接いただけることや、私たちの論文を読んでも驚かすことにもとても驚かしました。英語で成果を発表することで、自分の研究の位置付けを理解することができましたし、研究を通して世界のどこかへと繋がっていく楽しさを知ったことも、研究を続けていける理由の一つ

だつたかもしれません。こうした経験から、教科書の一文に積み重ねられた先人の智慧や苦勞にも想いを馳せることができました。私たちの身体の成り立ちの精巧さや緻密さ、かたちの素晴らしさにただ感動し、その仕組みにずっと魅せられていきます。論文という形で先人の成果が残されているお陰で、私たちはその先へと進んでいくことができ、科学は発展しています。研究の楽しさをより多くの人と分かち合おうことができると嬉しいです。現在は、粘膜や皮膚の形作りの仕組みや、ガンや炎症などの病態との関連について、温度や機械的刺激を受感するイオンチャネルを切り口にして研究を進めています。面白い結果も得られつつありますので、形態とからだの役割の面白さに興味がある方はぜひ研究室に遊びに来てください。

大学院修了後は臨床に戻り予定でしたが、教室の先輩が留学なさることになり、期限付きで解剖学の教官になりました。学位取得直前に出産しましたので、臨床に戻れば子供が病気をした時に対応ができるか心配でしたが、何より研究が楽しかつたのでとてもありがたい機会でした。基礎研究は長時間の実験に支えられますから、保育園の時間に縛られる生活はタフなものでした。子育てを通して、社会の中での女性や子供などの弱い立場を知ることができたのは後から考えるととても良い機会でしたが、当時は育児中の基礎研究者は学部の中にいませんでしたから、周囲の理解を得るのには困難でした。とにかく必死で目の前のことを毎日頑張りました。大事な時に限って子供が熱を出したり、自分が病に倒れたり、泣いてもどうにもならないようなことも経験しながら、本当に多くの方に助けていただき心から感謝しています。そして、時間が経つても諦めずに継続すること、何らかの結果に繋がる体験をできたことは今の私の糧となっています。

海外での研究生生活を希望していたのですが、子育て中の私にはなかなか機会が巡ってきませんでした。しかし、結果的に東京大学医学部解剖学の廣川信隆教授の下で研究させていただくことになりました。周囲は誰もまさか私を取ってくださるとは思っていなかったらしく、受け入れが決まった途端に反対を口にする人がいてびっくりしました。が、小さかった娘を福岡に置いて2週間に1回東京から帰るとい生活2年続けました。初めての一人暮らしで24時間を自分の時間として研究三昧できたのはありがたかったです。福岡から戻る東京モノレールでいつも涙がポロポロ出ました。思い返すとどうしてあんなことができたのか自分でもわかりませんが、その頃はとにかく焦っていて、何とか一人前になりたいの思いに突き動かされていたのだと思います。廣川研究室では、分子細胞生物学から生理学、タンパク工学、遺伝子工学、構造生物学と多様な研究手法を用いて、優秀な若者たちがしのぎを削っていました。

私も、神経細胞のモーター分子研究の一翼を担うことを通じて、研究のあり方を見つめ直す貴重な経験になり、また研究の幅を大きく広げることに繋がりました。そこで多くの研究者との交流は、今も貴重なご縁となっています。ありがたことに九大の元の教室に戻る機会をいただき、教育と研究を継続しながら、2人の子供を育てつつ今に至っています。

学生の頃は、性別で区別されることなど思ってもやらなかつたのですが、大学を卒業してから大きな違いがあることを知りました。また年齢を重ねるにつれて、私たち女性が学び自己実現の機会に恵まれていることは、多くの人々の闘いの歴史の上にあることを理解できるようになりました。世界には、未だ学ぶ機会さえ与えられず、家に閉じ込められ、あるいは暴力の犠牲になっている多くの人々がいます。そのことを思うと、私たちがとても恵まれていることに感謝しています。その一方で、日本の女性活躍指数が先進国の中で下位に甘んじていること、そして国連の女性差別撤廃委員会から勧告を受け続けていることをどうしようか。

科学技術分野における男女共同参画の動きに伴い、女性研究者人材の活躍促進は大学の運営方針でもあります。そのうねりに巻き込まれる形で、女性の医師や歯科医師、看護師の支援プロジェクトに何年も参加して10年になります。様々な角度から男女の区別や位置づけの違いを感じながら、なぜ女性支援なのかを絶えず自問自答してきました。そして、業績課や人事を適切に行い、優秀な人材の適所配置を行なう事がいかにデリケートで難しい問題であるかを実感しました。そうした中、欧米で進んできた考え方、すなわち国籍や性別や年齢、障害などに関わらず、多様なバックグラウンドを有した意欲ある人材が活躍できる職場環境を整えること、それが家庭内や地域での役割を果たすことが、一人の人間としての幸せ、さらにはより質の高い業績に繋がるという考え方の意義を解することができるようになりました。私は長い間、大学に居る間は特に母親としての役割が果たせていない罪悪感に苛まれ、家に居るときは十分な研究時間が頭をかすめるといような、いわばシーソーのような気持ちを抱えながら、綱渡りでその日乗り切っていくような余裕のない生活を続けてきました。ようやく、最近になって、キャリア形成に悩んでいる若い人たちに私の小さな経験や方法を伝えることが役に立つことを知りました。また子供の成長過程で、多様な角度から現代の教育現場をみる機会も得て、今の学生さんたちの将来を彼らの身になって一緒に考え、先人として適切な対応を取っていくことの重要性を感じています。

現在、佐賀大学のダイバーシティ推進を担当しつつ、拠点を作る準備をしています。これまでに増して、皆が思う存分情熱を注ぎ、活き活きと

どうした経験から、教科書の一文に積み重ねられた先人の智慧や苦勞にも想いを馳せることができました。私たちの身体の成り立ちの精巧さや緻密さ、かたちの素晴らしさにただ感動し、その仕組みにずっと魅せられていきます。論文という形で先人の成果が残されているお陰で、私たちはその先へと進んでいくことができ、科学は発展しています。研究の楽しさをより多くの人と分かち合おうことができると嬉しいです。現在は、粘膜や皮膚の形作りの仕組みや、ガンや炎症などの病態との関連について、温度や機械的刺激を受感するイオンチャネルを切り口にして研究を進めています。面白い結果も得られつつありますので、形態とからだの役割の面白さに興味がある方はぜひ研究室に遊びに来てください。

大学院修了後は臨床に戻り予定でしたが、教室の先輩が留学なさることになり、期限付きで解剖学の教官になりました。学位取得直前に出産しましたので、臨床に戻れば子供が病気をした時に対応ができるか心配でしたが、何より研究が楽しかつたのでとてもありがたい機会でした。基礎研究は長時間の実験に支えられますから、保育園の時間に縛られる生活はタフなものでした。子育てを通して、社会の中での女性や子供などの弱い立場を知ることができたのは後から考えるととても良い機会でしたが、当時は育児中の基礎研究者は学部の中にいませんでしたから、周囲の理解を得るのには困難でした。とにかく必死で目の前のことを毎日頑張りました。大事な時に限って子供が熱を出したり、自分が病に倒れたり、泣いてもどうにもならないようなことも経験しながら、本当に多くの方に助けていただき心から感謝しています。そして、時間が経つても諦めずに継続すること、何らかの結果に繋がる体験をできたことは今の私の糧となっています。

海外での研究生生活を希望していたのですが、子育て中の私にはなかなか機会が巡ってきませんでした。しかし、結果的に東京大学医学部解剖学の廣川信隆教授の下で研究させていただくことになりました。周囲は誰もまさか私を取ってくださるとは思っていなかったらしく、受け入れが決まった途端に反対を口にする人がいてびっくりしました。が、小さかった娘を福岡に置いて2週間に1回東京から帰るとい生活2年続けました。初めての一人暮らしで24時間を自分の時間として研究三昧できたのはありがたかったです。福岡から戻る東京モノレールでいつも涙がポロポロ出ました。思い返すとどうしてあんなことができたのか自分でもわかりませんが、その頃はとにかく焦っていて、何とか一人前になりたいの思いに突き動かされていたのだと思います。廣川研究室では、分子細胞生物学から生理学、タンパク工学、遺伝子工学、構造生物学と多様な研究手法を用いて、優秀な若者たちがしのぎを削っていました。

私も、神経細胞のモーター分子研究の一翼を担うことを通じて、研究のあり方を見つめ直す貴重な経験になり、また研究の幅を大きく広げることに繋がりました。そこで多くの研究者との交流は、今も貴重なご縁となっています。ありがたことに九大の元の教室に戻る機会をいただき、教育と研究を継続しながら、2人の子供を育てつつ今に至っています。

学生の頃は、性別で区別されることなど思ってもやらなかつたのですが、大学を卒業してから大きな違いがあることを知りました。また年齢を重ねるにつれて、私たち女性が学び自己実現の機会に恵まれていることは、多くの人々の闘いの歴史の上にあることを理解できるようになりました。世界には、未だ学ぶ機会さえ与えられず、家に閉じ込められ、あるいは暴力の犠牲になっている多くの人々がいます。そのことを思うと、私たちがとても恵まれていることに感謝しています。その一方で、日本の女性活躍指数が先進国の中で下位に甘んじていること、そして国連の女性差別撤廃委員会から勧告を受け続けていることをどうしようか。

科学技術分野における男女共同参画の動きに伴い、女性研究者人材の活躍促進は大学の運営方針でもあります。そのうねりに巻き込まれる形で、女性の医師や歯科医師、看護師の支援プロジェクトに何年も参加して10年になります。様々な角度から男女の区別や位置づけの違いを感じながら、なぜ女性支援なのかを絶えず自問自答してきました。そして、業績課や人事を適切に行い、優秀な人材の適所配置を行なう事がいかにデリケートで難しい問題であるかを実感しました。そうした中、欧米で進んできた考え方、すなわち国籍や性別や年齢、障害などに関わらず、多様なバックグラウンドを有した意欲ある人材が活躍できる職場環境を整えること、それが家庭内や地域での役割を果たすことが、一人の人間としての幸せ、さらにはより質の高い業績に繋がるという考え方の意義を解することができるようになりました。私は長い間、大学に居る間は特に母親としての役割が果たせていない罪悪感に苛まれ、家に居るときは十分な研究時間が頭をかすめるといような、いわばシーソーのような気持ちを抱えながら、綱渡りでその日乗り切っていくような余裕のない生活を続けてきました。ようやく、最近になって、キャリア形成に悩んでいる若い人たちに私の小さな経験や方法を伝えることが役に立つことを知りました。また子供の成長過程で、多様な角度から現代の教育現場をみる機会も得て、今の学生さんたちの将来を彼らの身になって一緒に考え、先人として適切な対応を取っていくことの重要性を感じています。

現在、佐賀大学のダイバーシティ推進を担当しつつ、拠点を作る準備をしています。これまでに増して、皆が思う存分情熱を注ぎ、活き活きと

4月に発生した熊本大地震は、大きな被害をもたらした。未だに避難生活を送っている方々も少なくない。心よりお見舞い申し上げます。

被災直後より、何か少しでも支援できることはないかと考えていたところ、熊本県の国際交流協会に在日外国人50名程が避難しており、食糧が足りないという情報もたらされた。早速、研究室に保管してあった教育・研修用の非常食(ビーフシチュー、乾パンなど)約120食分を提供し、避難所に届けていただいた。

2週間程して、被災者に対する医療支援のマンパワーがまだ足りないと言った。報道が連日なされた。国際保健看護学研究室の大学院生や卒業生から「5月の連休を利用して、支援に行こう」という声が上がった。総勢6名の看護師や保健師が、熊本県社会福祉協議会の依頼で、菊池市の被災地に向かった。その避難所や住宅を訪問しながら、健康状態の把握や看護活動を3日間行ってきた。被災地の住民からは「わざわざ佐賀から来てくださったとね。ありがとう」と、とても感謝されたという。私自身、彼らのために3日分の水や食糧、最低限の医療資材を準備することぐらいしか出来なかつたが、教員としての被害看護活動に目頭が熱くなる思いであった。

大学では、災害医療や国際看護の教育を担当しているが、やはり教育には座学による理論教育だけでなく、実践活動が必要不可欠である。8月には、2名の大学院生をパラオ共和国に派遣して、国際的な医療チームとともに、南太平洋の発展途上国における医療支援活動を体験させた。9月には、台湾の輔仁カトリック大学に看護学生4名を派遣して、異文化における看護の実際を学ばせる機会を得た。

今後、本学の卒業生たちが、国内外の医療現場で活躍し、大きく羽ばたいてくれることを願ってやまない。そのための基盤となる教育は、とても重要であり、教員として身の引き締まる思いである。

(新地)



第68回 西日本医科学生総合体育大会 成績表

主管校：徳島大学 競技日：平成28年8月6日～8月21日

Table with 4 columns: 参加サークル名, 種目, 結果, 出場校・選手数. Lists results for various sports like バレー, バスケット, 卓球, etc.

第55回 九州・山口医科学生体育大会 成績表

主管校：熊本大学 開催期間：平成28年3月12日～5月22日

Table with 4 columns: 参加サークル名, 種目, 結果. Lists results for various sports like バレー, バスケット, 卓球, etc.

九山・西医体 結果報告



九山で優勝したバスケ部の皆さん

学生課です！

皆さんお気づきかもしませんが、夏の人事異動にて学生課のスタッフが多少入れ替わっています。そこでこの機会に潜入取材を試みました。そこには、あなたの知らない学生課の真実の姿が...

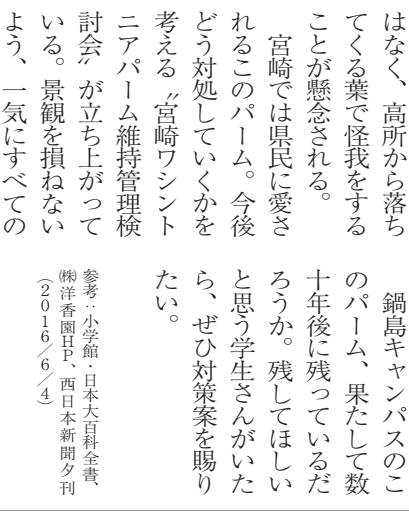
「簡単な自己紹介をお願いします」 生まれは大分で、しばらくして大阪に転出し、高校時代まで過ごし、霧閉気が似ている気が...

鍋島キャンパスにも南国情緒あふれるものがあるのをご存じだろうか。それが写真の如く、入道雲をバックにそびえ立つ、ウシントニアーム(以下、パーム)である。あまりにも背が高いため、意外と気付かない人がいるかもしれない。厳密に言えば、日本国内のパームはほとんどがワシントンヤシモドキだ...

医学部の風景⑦



鍋島キャンパスにも南国情緒あふれるものがあるのをご存じだろうか。それが写真の如く、入道雲をバックにそびえ立つ、ウシントニアーム(以下、パーム)である。あまりにも背が高いため、意外と気付かない人がいるかもしれない。厳密に言えば、日本国内のパームはほとんどがワシントンヤシモドキだ...



「学生さんへのメッセージをお願いします」 私は小中高と硬式野球が大好きです。部活でそのような仲間を作ってください。皆さんは、医師や看護師あるいは研究者への道が約束されています。もちろん、一に勉強、二に勉強ですが、時に課外活動や社会活動を通じ、人間力向上を図ってください。学生課はその名の通り、学生のためにあります。何か困ったこと(教務関係や生活面など)があれば遠慮なく相談に来てくだい。何か解決の糸口が見つかるといいですね。



「学生さんへのメッセージをお願いします」 私は小中高と硬式野球が大好きです。部活でそのような仲間を作ってください。皆さんは、医師や看護師あるいは研究者への道が約束されています。もちろん、一に勉強、二に勉強ですが、時に課外活動や社会活動を通じ、人間力向上を図ってください。学生課はその名の通り、学生のためにあります。何か困ったこと(教務関係や生活面など)があれば遠慮なく相談に来てくだい。何か解決の糸口が見つかるといいですね。

オープンキャンパス開催報告

今年のオープンキャンパスは、8月10日水曜日に開催されました。参加者数は、昨年度を120名上回る1,300名でした。恒例の学科説明会に加え、医学科ではPBL模擬講義、看護学科では在宅看護の模擬講義が臨床大講堂で行われました。...

編集後記

「ガレア踊りについて」 少々マニアックな話題で申し訳ない。先日ある会議の懇親会で、たまたま知り合った大学の先輩と、当時受けた解剖講義(学年こそ違えど、同じ教授陣から教わった)の話題に花が咲いた。中でもインパクト度No.1として意見が一致したのは、肉眼解剖学の初回講義で目の当たりにした教授の踊る姿である。講義の最中にいきなり踊り出すのであるから、確かにその衝撃は並大抵ではない。この踊り、我々は「解剖踊り」と呼んでいたが、実は「ガレア踊り」というのが正式名称で、豊年踊りをモチーフにしたものらしい。

新聞編集委員

- 倉岡晃夫教授(編集長)
河野 史教授、新地浩一教授、尾崎岩太准教授、柴田健太郎助手(副編集長)、鈴木源晟(研修医)、大野 渚、西原歩美、藤田真衣(医5)、岩永鴻之介、陣内一輝、吉岡瑞姫(医3)

要望などの連絡先

学生課総務
gkseigkm@mail.admin.saga-u.ac.jp